テクノロジーの〈解釈学〉

概要

人工知能に代表される高度で複雑化したハイテクノロジーは、単なる道具に還元されブラックボックス化されるか、抗えない変化をもたらすものとして扱われる傾向にあります。そうした立場からの議論では、近代技術や機械技術に基づく今日のテクノロジーは、それ以前の技術から分断されたものとして扱われます。しかしながら、テクノロジー／テクニクスの語源であるテクネー（技術知）は、アルス（芸術）や技芸をも意味する広義の概念であったことを踏まえると、連続的に捉えることもできるはずです。また、ギリシャ語で薬と毒を同時に意味する「ファルマコン」の概念は、技術が本質的にもつ両義的な性質を再考する道標となりえます。

本プロジェクトでは、テクノロジーに関する責任を手放さず、かといって決定論的なものだとして絶望しないための方策として、テクノロジーは誰もが自在に解釈し自分たちのものにできるという考え方に基づく作品群を提示すると共に、それらの作品群と体験者たちの経験を基に「テクノロジーの〈解釈学〉」として理論化することを試みます。

2年目となる本年度は、初年度に進めた準備を基盤とし、理論化と作品の再展示および再制作による実践を通じた検討を進めました。前期には6名、後期には3名の学生が参加し、プロジェクト実習ならではの協働による研究の実際を学びました。

活動

今年度は大きく3つの活動に取り組みました。まず、プロジェクトに参加するメンバーが議論の基盤を構築できるよう、技術哲学についての文献より前期は李舜志『ベルナール・スティグレールの哲学――人新世の技術論』（法政大学出版局、2024）、後期は小林茂『テクノロジーって何だろう？――〈未完了相〉で出会い直すための手引き』（BNN、2025）の輪読を行いました。

また、「テクノロジーの〈解釈学〉」と名付けた新しい技術論に関する理論的基盤を探究するため、外部ゲストを招いた研究会を開催しました。このシンポジウムでは、20世紀フランスの哲学者で、技術の存在様態や個体化の理論で知られるジルベール・シモンドンの研究者で哲学者の宇佐美達朗氏をゲストに招き、シモンドンの技術論に関する話題提供を踏まえて議論を深めました。研究会の運営にあたっては、事前に宇佐美氏の論文を読むところから当日の運営や質問まで、学生が主体となって進行しました。本研究会の様子を記録した動画も公開中です。
https://youtu.be/h-7Lx5pZgzQ

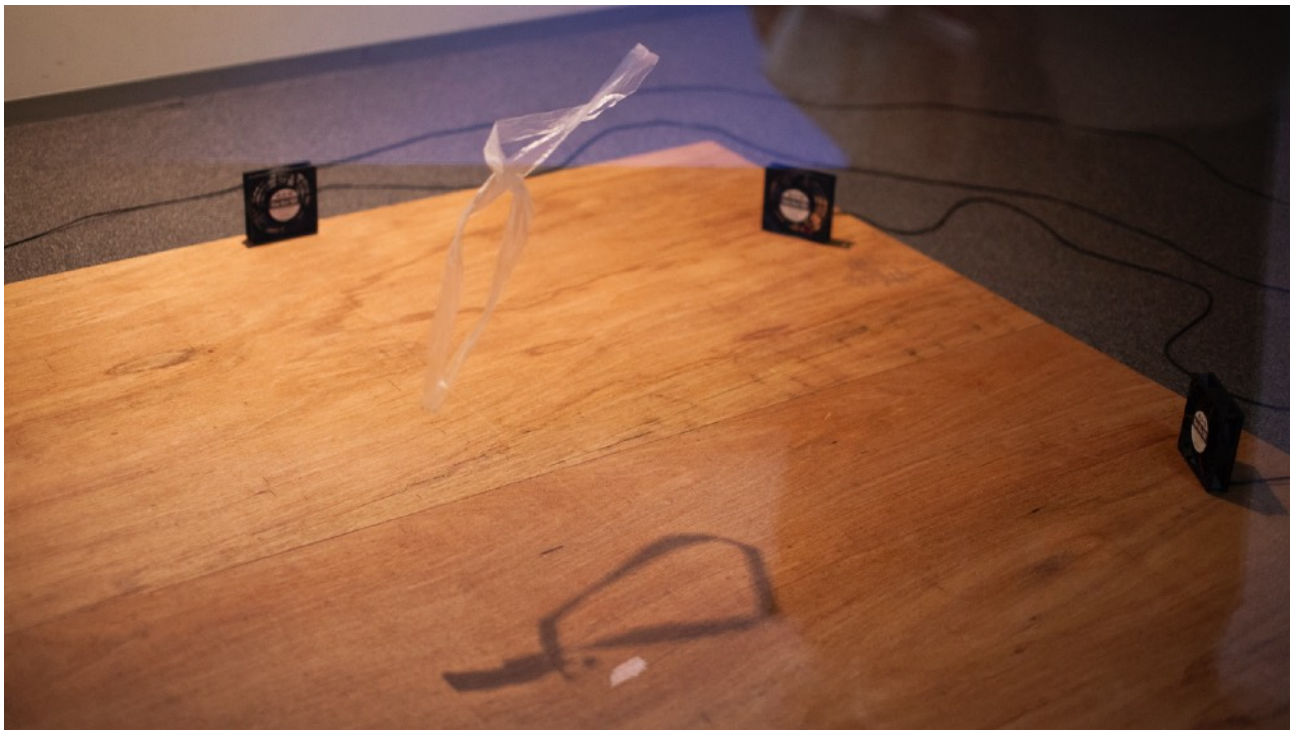
さらに、新しい技術論に基づく作品制作の前段階として、平瀬ミキ《氷山の一角》（2018/2024）の再展示と三原聡一郎《空気の研究 / Study of Air》（2017–2022）の再制作にも取り組みました。

《氷山の一角》は、同じ形状をしたオブジェが展示会場内に複数個配置され、それぞれをカメラで撮影し、半透明の状態で重ね合わせた状態でモニターに映されます。モニター上のオブジェはいずれも同じサイズに見えますが、実際のサイズはそれぞれ異なります。他の鑑賞者が映り込むことなどをきっかけとして、実際には別々の場所に配置されたオブジェが、同じサイズに映るようにカメラとの距離によって映像が調整されていることがわかります。これにより、目の前で起こる状況が、カメラやメディアを通じて伝わる時に起こりえる、情報の不確かさ、その違和感に気づかされるという作品になっています。このような作品となっているため、再展示の際にはシステムを構築するのにくわえて、オブジェをどこに配置するかを適切に選択し、極めて正確に配置しないと作品が成立しません。システムの構築とオブジェの配置を作者と共に行うことは、単なる物体から作品が立ち上るための条件を時間的内部から経験することになります。

《氷山の一角》再設置の様子

この経験を踏まえて取り組んだのが、《空気の研究 / Study of air》の再制作です。この作品は屋外に設置されたセンサーと屋内に設置されたファンと浮遊体から構成されます。屋外では、可聴域よりも低い周波帯域の空気振動——気配や存在感とも関連付けられるもの——を数値化するために6個の小型マイクを円環状に配置し、風を捉えるセンサーを構築します。屋内には、円環状に

配置した同数のファンをセンサーから送信された数値に基づいてリアルタイムで制御することにより、気流の変化を起こします。気流の変化自体は目に見えませんが、極めて軽いフィルム状の物体をその中に投入することにより、時にひらひらと浮遊します。この一連のシステムは、「空気を読む」などの言い回しに表れる、日本において空気と呼ばれる概念についての実践的な考察を目的としたものです。三原は、この作品のコンセプトや技術的詳細を「レシピ」として記載・公開し、再制作を許可することにより、自身の作品の根幹である揺らぎを生み出す過程を、作者以外の人にも想像可能にする——その方法自体をアーカイブすることを試みています。再制作の過程では、「レシピ」の記述だけでは定まらない様々な不確定要素や、展示会場の制約により「レシピ」から逸脱せざるを得ない部分があり、その都度解釈することを迫られました。作品として成立するところまで判断を繰り返すことは、作品の解釈を極めて深いところまで行うことになります。例えば、レシピに掲載されたマイコンの代わりにモジュール化された製品を使ってもよいのか、同じ型番の部品が入手できない場合にどうするのか、同じ浮遊体が入手できない場合に浮遊体の素材をどうするのか、キャプションには何をどのように掲載するのか、離れた場所の間の通信をどのように確保するのかなど、主要なものだけでも多くの点についての検討が必要でした。



再制作した《空気の研究 / Study of air》

このような再展示と再制作は、作品を入口としてテクノロジーに対する理解を深めていくことでもあり、それぞれの作品に特化した〈解釈学〉を構成していく機会ともなりました。

2026年1月に開催した研究会の様子

プロジェクト実習発表会2026

2026年2月20日から23日までの期間に開催されたプロジェクト実習発表会2026において、《空気の研究 / Study of Air》の再制作版を展示しつつ、三原氏を迎えた公開研究会を開催し、さらに後期の活動を中心とした活動報告を行いました。

再制作版は、ソフトピアジャパンセンタービル11階の「空中庭園」にセンサーを配置し、ファンは同じ建物の4階に設置しました。この再制作版をめぐって行った公開研究会における議論では、再制作の過程を通じて作品制作の時間的内部を学生たちが経験したことが窺えました。メディアアートの作品のアーカイブにおいては、テクノロジーや人々の変化に対応してどのように作品そのものとその経験を維持するかが問われてきました。作品のレシピを公開することは、作者が作品を成立させる条件として重視していることを明示すると共に、作品制作の時間的内部を次の世代に開くことになる、ということが確認できました。この経験により、特定の作品の再制作が可能になるだけでなく、その経験を基盤とする新たな作品が次々と生まれていく可能性があります。この研究会の議論からは、最終年度となる次年度の活動を行っていくうえで重要な示唆を得ることができました。本研究会で紹介した再制作の過程についてはウェブサイトで公開中です。

https://mayfair.notion.site/Study-of-air-30b7b61aea1c8035bd9eddceaf936c42

公開研究会の様子

なお、再制作した《空気の研究 / Study of air》は、The Terminal KYOTO（京都府京都市）にて開催された展覧会「現代性の環境」の会期前半（2026年3月7日から23日まで）に出展しました。
https://www.iamas.ac.jp/gendai/